

野間大樹 (兵庫県加古川市)

タイトル「バツタ」

僕の家付近には川があります。

川といっても、子供が遊ぶことのできるような美しい川ではなくて、ドブに毛が生えたような、そんな川です。でも、育った土地というのは不思議なもので、僕にとっては他のどんな川よりも、この川に愛着が湧くのです。特に、晴れた日の夕暮れときには、とても綺麗なオレンジ色に染まり、その風景が僕は何よりも好きなのです。

この川のすぐ横は林になっていて、この林もまた廃車や粗大ゴミが捨ててあって、あまり綺麗とは言い難いような林です。困ったことに、僕は虫が大の苦手な小中学校と通学路になっていたこの林の側を通るのは憂鬱なことでした。なにしろ、僕の虫嫌いは、この林によって始まったのですから。

僕が小学校に入って間もない頃、その林は僕たちの遊び場でした。かくれんぼや鬼ごっこ、虫捕りには最適で、親の目を盗んでは、みんな林で走り回っていました。

その日も僕は虫を捕りにその林にいました。けれど、虫捕りというのは小さな子供にはなかなか難しいものです。案の定、すばしっこい虫たちを捕らえることができずに少し飽きだしていました。退屈と疲れからその場に座り込んだそのとき、僕の前で一匹のバツタが現れました。

今だ、そう思った僕は手を伸ばし、見事その小さなバツタを捕まえると、早速家に持って帰ろうと思いき、二本の後ろ足を掴んで立ち上がりました。

そのときのことは今もよく覚えています。

バツタはなんと、そのとき、自らの足をちぎって逃げたのです。たったそれだけのことです。けれど、僕はそのとき命というものを見た気が、確かにしました。きっとそのバツタはもう生きていくことはできないでしょう。けれど、そうまでしても、一瞬でも長く生きなければならぬもの、それが命なのだということが、その瞬間に僕の心に激しく刷り込まれたのです。それがただしいことなのかは今でもわかりません。しかし、それが本来持っている本能だということは確かだと思います。また同時に、僕はなんと惨いことをしたのだらうという罪悪感が襲いました。まるで頭を殴られたような、そんな衝撃でした。

手の中でまだ動く二本の足に、腹の底から突き上げるような吐き気。これが僕の虫嫌いの始まりです。